精神療法

第37巻　第3号　別刷
2011年 6月　通巻第184号

● 論説

関係からみた「勘と勘繰りと妄想」（土居健郎）

小　林　隆　児

Ψ 金剛出版
TOKYO

論　説

関係からみた「勘と勘繰りと妄想」（土居健郎）

小　林　隆　児*

抄録▶先に筆者（小林，2010）は土居（2009）が論じたメタファーと精神療法との関係について，関係発達臨床の立場からその意味を再検証し，以下の結論を得た。関係発達臨床では，幼児期の養育者との「甘え」をめぐる病理である「アンビヴァレンス」の特徴を捉え，それをいかにして緩和するかを治療の焦点に当てているが，それは原初的知覚優位な原初的コミュニケーション世界のことであるゆえ，メタファーと精神療法に関する問題とも通底することを示した。
この論考に続いて，本稿では土居の数多き論文の中でも土居自身がとりわけ気に入っていた「勘と勘繰りと妄想」（1986）について再照射を試みた。この論文で土居は，予期せぬ変化に遭遇した際，その背後にあるものを探知しようとして起こる心の働きである「勘」が，当たっていないにもかかわらずそれに執着する状態が「勘繰り」で，妄想とはまさにそうした状態であるとした。
そこで筆者は自験例を示しながら，〈いま，ここで〉起こっている母子の関わり合いの中で，子どもの気持ちの動きに沿って応じるところに，「勘を働かす」ことが端的に表れていることを示すとともに，そこでは力動感 vitality affects が鋭敏に働くことが「勘が働いている」ことでもあることを論じた。
その一方で，母子の関係障碍の内実を検討すると，母親の「勘が働いていない」ことが大きな要因となっていることを示すとともに，その背景には，自らの子ども時代の母子関係で「甘え」にまつわる体験を享受することができず，高い自我理想のもとに，いつも「ねばならない」思いを強く抱きながら，子どもと関わってきたことが深く関与していることを示した。
ついで，妄想を呈した高機能自閉症成人例を示し，そこでも「勘繰り」が生まれた背景に乳幼児期から母子間で「甘え」をめぐる顕著な「アンビヴァレンス」が生まれるとともに，母親自身の子ども時代の「甘え」体験の欠如が，子どもに対する強い自我理想に基づいた関わり合いとして具現化し，そのことによって，患者は常に母親の顔色をうかがいながら生活してきたと考えられた。こうした関わり合いの特徴は，患者の他者の顔色をうかがうことを強化し，何事においても「勘繰る」習性を生み出したことが推測された。
土居が論じた「勘繰り」と妄想との関係について，原初的知覚という鍵概念を用いて再照射することによって，生物学的研究と精神病理学的研究の橋渡しの役割を果たしうるのではないか，筆者が本稿を纏めようと思い立ったもうひとつの動機はそこにある。

Key words ▶甘え，勘繰り，関係発達臨床，妄想，力動感 vitality affects

精神療法，37(3)：327-336，2011

はじめに

先に筆者（小林，2010）は，土居（2009）が主張したメタファーと精神療法との関係について，関係発達臨床の立場からその意味を再検証した。関係発達臨床では幼児期の養育者との「甘え」をめぐる病理である「アンビヴァレンス」の特徴を捉え，それをいかにして緩和するかを治療の焦点に当てているが，「アンビヴァレンス」は原初的知覚優位な原初的コミュニケーション世界での心的現象であるゆえ，メタファーと精神療法に関する問題とも通底すること

"Kan", "Kan-guri" and Delusion (Takeo Doi) in the Clinical Viewpoint of Relational Development

*大正大学人間学部臨床心理学科，Ryuji Kobayashi : Department of Clinical Psychology, Faculty of Human Studies, Taisho University

を示した。

先の論考に続いて，本稿では土居の数多き論文の中でも土居自身がとりわけ気に入っていた「勘と勘繰りと妄想」（以下，「勘繰り」論文と略す）（土居，1986）について再照射を試みた。なお，以下試論を始める前に，ひとつ断わっておきたいことがある。「甘え」は基本的に二者関係において起こる現象である。よって，土居が多様な精神病理の成り立ちを紐解く際に常に「関係性」の枠組みをもって論じてきたことは今更いうまでもない。しかし，本論で筆者が論題としてあえて「関係からみた……」と銘打ったのは，けっしてそのことを無視してのことではない。土居の臨床研究の対象は常に成人例であった。その中で明らかにされてきたのは，成人患者の語る過去の「甘え」にまつわる幼児体験である。それは「語り」であったがゆえに，「甘え」にまつわる親子関係の内実そのものに迫ることができないという限界性を持っていた。筆者は乳幼児期の親子関係そのものを対象とした「関係発達臨床」の実践を通して，土居の「甘え」研究に再照射を試みることによって，土居の主張が実際の親子関係の内実とどのように繋がっているか，そのことを明らかにしたいと思い立った。この一連の論考の強い動機はそのことにある。論題を「関係からみた……」とした理由はそこにあることを初めに断わっておきたい。

I　土居の主張について

「勘繰り」論文で土居は，統合失調症患者にみられる妄想について，日本独特の日常語である「勘」と「勘繰り」という視点からその成り立ちを考え，新たな治療の手だてについて提起している。まずはその論旨を解説する。

「勘」について

「勘」は，「何か予想しない変化に遭遇した際，その背後に何があるかを探知しようとして起きるこころの働き」（p.356）[注1)]を意味し，その背後にあるものに対して，それを「成立させている隠れたコンテクストを探り当てること」（p.357）が「勘を働かす」ことだと説明する。この「コンテクストなるものはコミュニケーションの内容を決定する重要な枠組である」（p.359）ことから，「コンテクストを探り当てる勘がコミュニケーションを成立させる条件である」といえる。しかし，勘を働かせることは誰にとっても容易でないのは，その場で「いつどのようなコンテクストが選ばれるかには無限の可能性がある」（p.359）ためである。「したがってそのつど選ばれたコンテクストに照準を合わせることができる点に勘の良さが現れる」（p.359）。コンテクストは当事者の関係の内実そのものに規定されているゆえに，コンテクストを探り当てるのは誰にとっても容易なことではないのである。

「勘を働かす」こと

土居が「勘繰り」論文を書く強い動機となったのは，マイケル・シェファードの『シャーロック・ホームズとフロイド博士のケース』を読んだことにあると述べている。そこで土居は，シェファードが科学的でないと批判的に論じている「シャーロック・ホームズの方法もフロイドの方法も，そこで用いられる思考過程が日本語の勘にぴったり当てはまる」（p.349）ことに気付いた。さらに土居が興味深く思ったのは，シェファードが「シャーロック・ホームズの方法とフロイドの方法のいずれをも，十九世紀に絵画の鑑定を開発したジオヴァンニ・モレリの方法に関係づけていること」（p.357）であった。そして「モレリの方法というのは，画家の特性は，たとえば，耳の形のように，画全体から考えれば一見とるに足りない細部の描き方に現れ，したがってその点に注意することによって本物か偽物か見分けられるとしたことを指す。すなわち，絵画の鑑定においては細部が重要なコンテクストを提供する」（pp.357-358）というのである。

精神分析に立脚した人間理解の方法が，シャーロック・ホームズの推理方法やモレリの絵画鑑定の方法とのあいだに共通性を持つことを指摘したシェファードの試論に土居はいたく共鳴

注1）「勘繰り」論文の引用箇所の頁数を示しているが，ここでの引用は土居（1994）に依っている。これ以外の論文や著書からの引用では，その都度引用文献と頁数を記載している。

し，その共通性こそ「勘を働かすこと」であるというわけである。

感情移入 Einfühlung と共感 empathy

感情移入 Einfühlung と，その訳語として生まれた共感 empathy は精神療法における患者理解の際に，基本的かつ重要な資質として位置づけられ，今や常識と化しているものであるが，土居はこの感情移入ないし共感が「勘」にきわめて近いことを指摘し，その理由として，コミュニケーションの質を決定するコンテクストを探り当てることが「勘」の本質的な働きだとすれば，コミュニケーションにおいてもっとも重要なコンテクストの一つが感情であることから，「勘が相手の感情に対して働く場合を特に取り上げて精神分析ではエンパシーと名づけているといってさしつかえないのである」(p.361) と述べている。

「甘え」にまつわる感情の動きと原初的知覚

「勘」が相手の感情に対して働く場合を共感だとすれば，ここでいう感情とは感情一般を指すのであろうか。「勘繰り」論文で土居はそのあたりのことについては明言してはいないが，その他の論考を読み合わせて考えると，主に「甘え」にまつわる感情の動きに敏感になれということであることは疑う余地のないところである。

では相手の「甘え」にまつわる感情の動きを感じ取るにはどうするか。相手の感情を自ら感じ取ることができるのは，情動といわれるこころの働きが二者間で共振するという性質を持っていることに依っている。つまりは情動水準のコミュニケーションの世界で起こっている現象であるのだ。したがって，相手の感情に対して「勘」を働かす際には，相手と関わる際の自らの感情の動きに敏感でなくてはならない。

ここで考えてみたいのは，「甘え」にまつわる感情の動きとはどのような内実を持つものなのかということである。「甘え」が人間関係において接近を喜ぶ感情（土居，2001，p.84）であるゆえ，「甘え」が享受されている場合には，接近によって快の情動がもたらされる一方で，分離（または回避）によって不安という不快な情動が誘発される。物理的（あるいは心理的）距離の変化と快／不快という情動の変化が相互に連動して起こっている。このように接近や分離といった動きと情動が同時的に機能しているところにこそ，実は筆者が常々強調してきた原初的知覚の性質が端的に示されている。なぜなら原初的知覚は，あらゆる刺激のもつ動きの変化を鋭敏に捉えるという性質を有するが，それと同時的に，情動の変化をも引き起こしているからである。これまで筆者は原初的知覚の体験様式の特徴を，〈知覚－運動－情動〉過程という未分節な体験であると述べてきたのは，そうした意味合いがあってのことである。「甘え」にまつわる感情の動きに気づくことを可能にしているのは，原初的知覚として力動感 vitality affects（Stern，1985）に依っているところが大きいといわなければならない。

原初的知覚と「平等にただよう注意」（フロイド）

したがって，「甘え」という非言語的コミュニケーション[注2]世界に敏感になること，つまりは「勘をよく働かす」ためには，この原初的知覚に敏感になれということでもある。ここで重要なことは，この原初的知覚は自らの身体を通してしか感知することができないという特徴をもっているということである。原初的知覚での体験様式は，自他融合的体験であり，そこでは同一化が起こっているといっても差し支えないのである（小林，1993）。

「フロイドが精神分析の治療者にすすめた『平等にただよう注意』は，勘を働きやすくするための心構えと考えられ」(p.361)，「患者の発する言葉の一つ一つにとらわれず，注意を満遍なくただよわすことによって，言葉の背後にあるものを掴みやすくするということは，結局のところそこに隠れているコンテクストに照準を合わすこととなる。この場合相手の言外に秘められた感情がそのもっとも重要な要素である」(p.361) が，ここで示されている体験過程の多くは，原初的知覚に依っているということ

注2）土居は「甘え」の世界を非言語的コミュニケーションとしているためここではそれに倣ったが，筆者（小林，2010）は原初的知覚優位な世界であることから，原初的コミュニケーションと称する方が適切であると考えている。

もできるのである。

土居（2009，p.27）は（集団）精神療法の中で患者のこころの動きをとらえる際にその一挙手一投足，とりわけ非言語的コミュニケーションに注目することを力説する中で，「このような微妙な手掛かりを捉えるためには，治療者自身，十分「甘え」の心理に習熟していなければならない。言い換えれば自分のアンビヴァレンスが見えていなければならない。そしてそれこそもっとも困難なことであるといわなければならないのである」とも指摘しているように，原初的知覚に敏感になることもさほど容易なことではなく，自らの身体を通した体験過程に対する気付きの力を養う必要があると言ってもよいのである。

以上述べたごとく，土居は日本独自の文化的背景の中で生まれた「勘」を鍵概念に，精神療法でもっとも大切な感情移入ないし共感を読み解き，そこに共通して流れる非言語的コミュニケーションの世界の重要性を指摘しているが，臨床場面で「勘を働かす」とは具体的にどのようなことを指すのであろうか。つぎにそのことについて以前ほかの論考で取り上げた自験例（小林，2009）を通して考えてみよう。

II　自験例から

B男　2歳11カ月

ことばの遅れと，視線が合いにくく，関係がしっくりこないという母親の心配で相談に来た母子例である。ほかの医療機関であれば，おそらく広汎性発達障碍と診断されたであろうと思われる事例である。

母子同席で初回面接を実施した。母親はすぐに話を聞いてもらいたそうにしていたが，まず筆者は少しの間，B男の相手をして遊んでみた。

B男はこちらの様子をうかがうようにちらちらと視線を送りながら，ボールを手にとってバスケットボールのかごに盛んに投げ入れていた。うまく入らなくても投げやりになることなく，何度も挑戦していた。今度はバットを手にとってボールを打ちたそうにした。筆者がボールを投げてやると，すぐに応じ懸命になって打ち始めた。空振りになっても何度も何度もバットを振り続け，うまく打てた時には控えめではあったが，両足をばたつかせて，喜びを全身で表に現わしていた。

筆者はB男の反応に手ごたえを感じながら，今度は母親にB男の相手をするようにバトンタッチをした。母親とB男の遊びに付き合いながらその様子を見ていた。母親は最初は一所懸命に相手をして遊んでいたが，子どもの心配事を聞いてもらいたくて次第に子どもよりも筆者のほうに注意が向き始めた。筆者は同伴していた祖母と机を挟んで向かい合って座り，母子の様子を時折眺めながら祖母と話していた。B男は母親と遊んでいたが，ボールを投げた拍子に，面接机の上にあったコップに当たって少しお茶がこぼれた。B男は「しまった！」とでもいうような困惑した表情を浮かべ，母親の背中にしがみついた。いかにも悪いことをしたという思いが全身の動きに感じ取れた。母親はその時のB男の反応を見て，こんな姿を見たことはないとうれしさと驚きの入り混じった声をあげた。まもなくB男は部屋を出て行った。

その後，母親面接に移って，母親が心配してきたことが語られ始めた。筆者は「これまでB男の子育てで心掛けてきたことは何ですか」と尋ねると，「振り返ってみると，何もないかもしれない。上の姉や兄の行事に一緒に連れていくことが多く，家にいる時には一人で遊んでいるので，それをいいことにして家事に専念していることが多い」と振り返るのだった。そこで筆者は「そうした親子関係が今の子どもの様子と何か関連があると思いますか」と尋ねた。すると母親はいろいろなことが一気に思い起こされたようで，つぎつぎに語り始めた。筆者はゆっくりゆっくりと一語一語噛みしめるようにしてことばを繋ぐように心掛けていたが，母親はこちらの一言に対して，実に多くのことを返してくるのだった。その時，筆者は，母親のせっかちで先取り的な話し方にこちらの気持ちが萎えてしまいそうな感覚に襲われた。そこで筆者はそのことを取り上げた。すると母親は顔面を紅潮させながら思い当たることがあると一気呵成に語り始めた。

自分は子どもに対してなぜか待てないところがある。自分の望むタイミングで子どもに行動してほしいと思ってしまい，つい子どもに対し

て怒ってしまうことも多いというのである。たとえば，上の娘（長女，8歳）はデリケートな子で，あまり話さないが，いろいろと一人で考えている。本を読むのが好きで，大人びたところがある。能力は高いと思うのに，学校から帰ってもすぐに宿題をやらない。やらなくてはいけないとわかっているのに，やろうとしない。今やればすぐにできると思うのに。夜になって時間がなくなってからやろうとする。そんな姿を見ているといらいらする。二番目の息子（兄，4歳）は姉と弟の間に入って気を使っている。母親からみるととてもできた子……

このように筆者が母親との面接の中で感じたことを取り上げたことをきっかけにして，母親は三人の子どもとの関係についてつぎつぎに思い起こして語るようになった。

まもなくB男がセラピストと一緒に部屋に戻ってきた。すると一目散に母親のところに走って行き，首に強く抱きついたのである。B男は心から甘えているのがひしひしと感じられたが，母親の気持ちを尋ねると，素直に「うれしい」と答えるのだった。しばらく母親の膝の上でじゃれていたが，満足したのか，ふたたびセラピストと遊び始めた。

原初的知覚とメタファー

初回面接で，母親が子どもに対する自らの思いを率直に語り始めたのは，母親のせっかちで先取り的な話し方にこちらの気持ちが萎えてしまいそうに感じた筆者がそれを取り上げたことが契機となっている。筆者にこのような反応を引き出したのは，せっかちで先取り的な話し方のもつ力動感が，筆者にはまさに「こちらの気持ちがなえてしまいそう」なものに感じ取れたからである。ここにみられる筆者の表現は，先の論考（小林，2010）でも述べたように，メタファーと構造的には同じ言語表現だといってよい。

ではなぜこのようなメタファー的表現が母親との面接を深める契機となったのであろうか。このメタファーを生みだしたのは，母親と筆者との関係の中で湧き起こった体験過程であるが，それを可能にしたのが原初的知覚に基づく体験であることから，そこでは母親と筆者との間に情動水準での交流が生まれたといってもよいのではないか。さらに興味深いのは，母親と筆者との関係での体験過程は，日頃の母親と子どもたちとの関係とも合い通じるものがあったがゆえに，このメタファー的表現が母親に対して，子どもとの関係についての想起をも誘発することになったのではないか。治療経過の中にそのことが端的に示されていると思われるのである。

このような母親の変化を敏感に感じ取ったB男は別室から戻ってくるなり，一目散に母親のほうに寄っていき，抱きついてきている。日頃の母親に対する近寄り難さが薄れたための反応であったに違いない。そうした母親の変化をB男はいち早く敏感に感じ取っていたのである。母親と筆者との間に生まれた「共感」的体験が母親のそれまでの警戒的な構えを緩めたことによって起こった変化だと思われる。土居がメタファーの重要性を指摘してきたことがここにも示されているといえよう（土居，2009，pp.155-176）。

初回面接を終えて帰宅した夜，帰ってきた夫が「今日のお母さんは違うね，随分やさしいね」と驚きの声をあげるほどに，いつものいらついた気持ちが治まっていたという。B男も母親に随分と甘えるようになって，ひとりでビデオを見せても，すぐに母親の手を引いて一緒にみようと引っ張り込んで母親の膝の上に乗って見るようになったというのである。

2回目の面接

面接の開始後しばらくの間，母親にB男と一緒に遊ぼうと促し，筆者も付き合った。B男は小さなスポンジボールを二個手に持っていた。それを見て母親はすぐにそのボールとセットになっているゲートボール用のスティックを取り出し，B男に手渡して使うように誘った。B男は戸惑っていたが，母親はなんとか使えるようにと手を携えて教えていた。するとB男はスティックを手に持って小さなトランポリンの下を覗きながら，まるでモップがけするようにして出し入れし始めたのである。

前回とは異なった年長児向けの遊戯室であったため，先週使った部屋にB男を招き入れて，扱いたい遊具を選ぶように誘った。ボールを選んだが，それは先週バッティングの時に用いたものだ

った。筆者がためしに差し出したバランスボールを手に取ると，元あったところに自分から片付けるのだった。すぐに元の部屋に戻ったが，筆者はバットも欲しいだろうと思い，部屋の片隅にさりげなく置いてみた。すると目ざとく見つけてバッティングを始めた。母親がボールを投げてやり，B男はバットで打ってはうまく当たるとうれしそうに反応していた。周囲の大人たちも拍手をし，雰囲気は盛り上りを見せていた。結構楽しそうにしていたが，次第に飽きてきたのであろうか，バットの持ち方が変わったのに筆者は気づいた。それはまるでバットが刀に変ったように見えた。しかし，母親はそれに気付かず，なんとか打たせようと懸命に相手をし，B男がその気になるようにさかんに仕向けるのである。そこで筆者はそばにあったゲートボール用のスティックを手にとってちゃんばらごっこを始めた。するとB男はバットを刀にして応じ始めた。遊びにどんどん熱が入り，懸命になって切りつけ始めたので，筆者はおどけるようにして怖がって逃げた。するとB男は追いかけてまでちゃんばらごっこを続けるのだった。

「勘」を働かす

この場面で筆者は，B男が何をしようとしているか，常に彼の気持ちに照準を合わせながら相手をしていた。時には「スティックを手に持って小さなトランポリンの下を覗きながら，まるでモップがけするようにして出し入れしていた」かと思えば，つぎに「バットの持ち方が変わったこと」から「バットが刀に変化した」ことを瞬時に感じ取りつつ，B男に応じることによって両者の関係は瞬く間に深まっている。ここで筆者がもっとも心を砕いたのは何かといえば，「コンテクストを読み取ること」であり，まさに「勘を働かす」ことであったということができよう。

「勘」が働かない

その一方で，子どもの遊びに付き合っている時，子どもが何を意図して遊んでいるか，それに同調することが母親にはむずかしかったことが示されている。子どもとのコミュニケーションが成立するためには，子どもの繊細な動きに同調し，そのこころの動きを掴むことが求められるが，それがこの時の母親には難しかったのだ。つまりは，コミュニケーションを成立させるための条件である「勘」がここではうまく働いていない。母親は，バットを持っていればボールを打つことであるというように，教条的に捉えて応じている。「バット」は「ボールを打つ」ための道具であるという既成概念にとらわれている。

ここでぜひとも考えてみたいのは，母親が子どもとの遊びで，そのコンテクストを読み取ることができなかったのはなぜかという問題である。そのことを考える上で興味深いことが以下の治療経過の中で示されている。

まもなくB男の相手を同席していたセラピストに頼み，筆者は母親との面接を開始した。そこで取り上げたのが，遊びがちゃんばらごっこに変わった場面である。母親はB男の変化に気付かなかったというが，以前からちゃんばらごっこだけはなぜか母親に要求してよくやっていたというのである。そこで筆者は母親が頭の中でこうと思ったらそれをやり続けるところがあることを取り上げた。つまりは玩具を扱う際に，それがバットであれば野球を，ゲートボールのスティックであれば，ゲートボールをしようという思いに駆られやすいことについてである。母親はすぐに頷き，涙ながらに次のようなことを語り始めた。

昔から固定観念が強いと他人に言われていた。「〜しなくては（いけない）」という思いがいつも強いという。そばで聞いていた祖母は，この子は理想を持ってそれに向かっているが，どうもそれが高すぎる。きちんとしなくてはという思いが強すぎるというのである。母親は次第に内省的になった。

自分の持っていないものを他人がもっているとうらやましくなる。その人の良いところばかりが目につくようになり，自分の嫌なところ，苦手なところを人に見られたくないという気持ちになる。だから人づきあいも深入りしたくない。深入りすると相手のいろいろなところが見えてくるし，自分もみられるから怖い。人づきあいは必要に迫られれば，そのところだけ付き合うようにしているというのであった。

高い自我理想と教条的関わり

筆者が母親の教条的な捉え方について取り上げたところ，母親は急に自らのこれまでの対人関係の中で思い煩っていたことを言及するまでに至っている。そこで語られた内容は，なぜか対人関係が深まることによって自分の弱みを知られるのを極力忌避し，高い自我理想を持って生きていたという。親の前ではいつも親の期待に応えるべく努力することで初めて親から認められてきたのではないかと推測されるが，それとともに大切だと思われるのは，対人関係が深まることによって自分の嫌なところが他人に知られることに対する忌避的感情がこの母親ではとても強いことである。本来であれば，乳幼児期に「甘え」が享受されていれば，接近が快の情動をもたらすと考えられるが，この母親に対人関係に対する忌避的感情が強いということは，接近が不快ないし否定的な情動をもたらすということである。その背景に「甘え」が享受されなかった体験が潜んでいることが推測されるのである。

乳幼児期に母親との間で甘えられなかった時，甘えたい心はけっして消えることなく，持続するものであるが，そこでは，「甘えた場合とは違う別種の依頼関係が成立する……。……甘えられないのであるから，依頼心は満足されていないが，しかし満足を求めるこころは持続しているために，相手方の出方に自分の感情が鋭敏になり，結局は自分の気持ちが相手によって左右される変態的な依頼関係が成立することになるのである」（土居，1994，p.29）。その結果，この母親はいつも自分の母親の顔色をうかがいながら，期待に沿うべく努めてきたのであろう。高い自我理想を持ち続けてきた背景にはそのようなことが考えられるのである。このような強い対人意識は，子どもの心の動きを感知する力を低下させ，教条的なかかわり合いになりがちである。とらわれのない心的状態でなければ，常に変化していく子どものこころの動きを感知することなどできるはずはないからである。このように「勘」の働きの善し悪しは，けっして個人の資質といった生来的な要因に帰着できるものではなく，当事者自身の乳幼児期における「甘え」の体験の質とも深く関わっているということができるのである。

Ⅲ 「勘繰り」について

「勘」は「何か予想しない変化に遭遇した際，その背後に何があるかを探知しようとして起きるこころの働き」を指すことからも分かるように，明確に客観的な形では捉えられないものを探ることであるため，かならずしも常に当たるわけではない。さらには「勘がはずれているかどうかすぐには明白にしがたいことのほうが多い」（p.359）とさえいえる。したがって，「本来はコミュニケーションに奉仕すべき勘がコミュニケーションと無関係に存在する状態が勘繰りであり，それこそ分裂病[注3)]的妄想に通じる状態であると考えられる」（p.363）。つまり，患者が治療者に対して，あるいは他者に対して「勘繰る」ことが起きているとすれば，そこで「本来はコミュニケーションに奉仕すべき勘がコミュニケーションと無関係に存在する状態」（p.363）が生まれていることになる。では勘がコミュニケーションと無関係に存在する状態がどのような背景でもって生まれるのか，自験例を取り上げて検討してみることにしよう。

Ⅳ 自験例から

過去に筆者は（高機能）自閉症の成人期例において妄想状態を呈した事例を報告したことがある（小林，1995）。これはのちに「自明性喪失」の問題を論じる際にも取り上げている（小林，2003）。以下はその事例の治療経過の概略を示す。

明子（仮名） 初診時25歳 （高機能）自閉症

幼児期より自閉症としては知的発達も比較的良好で，家族の期待もあって高校入学までは順調な発達を遂げているようにみえた。高校3年の時，父親の病死を経験したが，どうにか卒業後就職することもできた。しかし，まもなく職場で適応困難となり，対人的トラブルが続出していった。つ

注3）ここでは引用文であるので「統合失調症」を用いず，原文のまま「分裂病」と記載している。

いに出勤さえ困難となり，1年あまりで解雇された。社会適応の改善を目指して精神保健センター（当時）のデイケアにも通ったが，そこでも引きこもり傾向が顕著となり，家庭で母親への暴力行為も出現したために，筆者のもとに受診となった。

初診当時，周囲に対する警戒心が強く，視線を強く回避していた。特に目に付いたのが，周囲の人たちはきれいで，自分だけ醜いという確信的な思いに囚われていることであった。自分の容姿への囚われが妄想化していると判断された。彼女の容姿に対する囚われは，強い強迫性を背景に有していた。

妄想発現の直接の契機は，第二次性徴発来が友人より遅れたことにあったが，容姿コンプレックスが増大した要因として，幼児期からの容姿への強い関心と，高校で障碍児のための特別編成学級に入れられたことによるプライドの傷つきなどが関与していた。さらに家族背景に，自我理想の高い母親自身も思春期に摂食障碍を呈し，性同一性の獲得をめぐる葛藤を有していたことがその後の面接で明らかになった。

治療は母親自身が娘のハンディキャップをどう受容し立ち直っていくかという喪の作業に対する心理的援助を中心に展開された。当初は母子間の強い緊張が高じて明子は母に激しい攻撃的行動を示したが，まもなく母自身の過去への内省が契機となって，明子も自らの心理的外傷体験を言語化するようになり，母子とも社会的引きこもり状態から次第に脱皮していった。

明子は「まなざし」に対する恐怖のために視線を回避し続けていたが，恐怖の対象は薬品に描かれた人物像やまな板に刻印された魚のマークの「まなざし」にまで及ぶなど，病者にとって自らの環境世界は圧倒的な力でもって相貌性を帯びて迫り来るものであった。このように対象が相貌的に知覚された直接的契機は第二次性徴発来にまつわる心理的外傷体験であったが，その基盤には自閉症特有な知覚様態である相貌的知覚（原初的知覚）が活発に働いていることが示唆されたのである。

容貌への「とらわれ」

明子の容貌へのとらわれが妄想化する直接的な契機となったのは，第二次性徴の時期に友人との比較で彼女自身が身体に対して強い劣等感を抱いたことであった。この時期，女性であれば自らの身体に対する意識が高じるために，このような体験が外傷的に作用することは大いに考えられるが，このような劣等感を持ちつつも，それが妄想化していったのはなぜか。

自閉症の子どもたちでは養育者との間で乳幼児期早期から「甘え」のアンビヴァレンスが強いために，養育者との関係は負の循環を生み，両者のあいだに関係障碍がもたらされる（小林，2008）。その結果，養育者との間で安心感が育まれず，常に周囲他者に対して強い警戒的な構えを持ち続けるが，明子の場合そのことは常に他者にのぞかれないように顔を前髪で隠し，視線を合わせることを極力避けてきたことに端的に示されていた。そこでは，彼女にとって外界刺激は迫害的ないし侵入的色彩を帯びたものに映っていた。自分は醜く周囲のみんなはきれいだとの思いが強まっていくのもきわめて自然な成り行きであった。つまり，明子にとっては世界の相貌性があまりにも侵入的色彩を帯びていたがために，周囲ばかりが輝いて見えていたのである。

自我理想の高い母親と被養育体験

しかし，明子が自閉症で幼児期から養育者に対して強いアンビヴァレンスを持っていたがゆえに，このような強い被害感を抱くようになったと短絡的に考えることには慎重でなくてはならない。本来であれば，思春期での明子の不安を吸収すべき役割を果たすことが期待される母親自身が，実は自ら思春期のころ，容貌へのとらわれからダイエットを試み，摂食障碍を呈するまでになっていたことが明らかになっている。さらには，スーパーウーマンともいえるほどに自信家であった自分の母親との関係では，いつも母親の期待に沿うべく努力してきたという。母親が明子に対して，なんとか普通教育を受けさせ，就職できることに最大の目標を置いて，遮二無二頑張ってきた背景には，母親自身のこのような被養育体験が深く関与していることが考えられる。このように見ていくと，先の幼児例の母親自身の子ども時代の体験と酷似していることに改めて気づかされる。母親が明子の現実の不安に思いを馳せることが困難であったの

は致し方なかったかもしれない。そのために明子の思春期不安が吸収されることがなかったことが，彼女の周囲世界の侵入的色彩をより一層色濃くしたのではないかと考えられる。しかし，今回の母親面接を通して，母子間の緊張関係が初めて緩み，関係修復がもたらされ，その結果として明子にとっての周囲世界の侵入的な相貌性は緩和し，引きこもりからの脱皮が可能になったのである。

「勘繰り」と妄想形成

土居の「勘繰り」論文で提示されている事例は，統合失調症であり，自閉症とは違って，日常会話は一般に可能であるし，知能の問題もない。よって，自己表現能力も豊かで，そのことによって，患者が治療者に対して「勘繰り」続けていたことは比較的容易に把握することができている。しかし，この自閉症の事例では，いかに知的障碍がなかったとはいえ，その精神内界を窺い知ることは容易なことではない。その点からすれば，明子の場合，周囲他者に対して「勘繰り」続けていたと明示することは困難だと言わざるを得ない。しかし，周囲に対して常に強い侵入不安を抱き続けていたことを考えると，明子が周囲他者の動きに対して，彼女なりの「勘」を常に働かせていたのであろう。そして，その「勘」がコミュニケーションの実情と一部無関係に働いて，「勘」が「勘繰り」になっていった。「自分だけ醜く，周囲のみんなはきれいだ」という妄想が生まれて固定した過程を「勘」と「勘繰り」を用いて表現すると，以上のように考えることができるのである。

V 「勘繰り」論文の事例について考える

異常体験と原初的知覚体験様式

土居が「勘繰り」論文で提示している事例の中で，患者が自らの異常体験について語っている内容は実に興味深い。患者は次のように語っている。「どのような状況でも愛情に関連のあることが感じられるときは，周りの状況が一変し，周りの状況が乗っ取られる感じがする。自分が侵入される感じ，自分の感情が押し流されて，相手の感情が自分の中に侵入してくる感じです」，「勘繰っているときは，ゴッホの絵の中の樹のように周りの人が変貌する」と，臨場感溢れる描写がなされている。土居もこの患者の病的体験を語る描写力にはいたく感心しているが，筆者はそれと同時にこの体験内容が先ほどから筆者が述べてきた原初的知覚体験様式そのものの特徴を実に分かりやすく語っていることに驚きを禁じ得ないのである。

世界の相貌化と相貌的知覚

ここで患者が述べている体験様式は，それまでの周囲世界の相貌性が急速に変貌を遂げ，迫害的な色彩を帯びていることが示されている。このような体験様式の特徴こそ，原初的知覚そのものの働きである。当事者の内面の変化，とりわけ安心感にまつわる変化，すなわち急速に安心感が失われ，対象喪失の恐怖に襲われる時，周囲世界の相貌性が急速に迫害的色彩を帯びるようになる。これこそ原初的知覚体験様式の特徴を示している。とりわけここでいう原初的知覚は先に述べた力動感とともに類似の特徴をもつ相貌的知覚 physiognomic perception（Werner，1948；小林，1993；小林，1994）といわれてきたものである。さらに，このような体験の引き金となっているのが，「愛情に関連のあることが感じられるとき」だという。これぞまさに相手との「甘え」にまつわる感情が強く揺さぶられていることを示しているが，それは潜在化していたアンビヴァレンスがそのことによっていたく刺激されたと考えられる。「甘え」にまつわる感情が刺激されると，強い「アンビヴァレンス」を抱えた患者であれば，内面に強い動揺が起こり，さまざまな異常行動や症状が出現するのは，相反する接近と回避の動因葛藤状態がより一層強まるための結果であることを筆者は発達障碍を対象に明らかにしてきたが（小林，2001；小林・原田，2008），このことは統合失調症においても該当するのではないかと思われるのである。

おわりに

本稿では筆者のこれまでの「関係発達臨床」から得た知見を通して，土居の論文「勘と勘繰

りと妄想」に再照射を試みた。そこで以下のことを明らかにした。「勘」と「勘繰り」は原初的知覚に基づく体験とみなすことも可能で，このような視点を持つことによって，統合失調症の「妄想」の成り立ちにおける原初的知覚の果たす役割が明らかになる。「原初的知覚」という鍵概念を用いることを通して，知覚，情動という生物学的次元に近い現象と「甘え」にまつわる種々の精神病理現象の関連を統合的に理解する道が切り拓かれるのではないか。生物学的研究と精神病理学的研究との橋渡しの役割を果たしうるのではないかということである。この点についての詳細は別稿に譲るとしても，Stern (2010) は原初的知覚としての力動感の神経学的基盤について，脳幹網様体賦活系と扁桃体を中心とした脳幹から大脳辺縁系に至る部位に着目しているが，人間の行動を選択する際の重要な価値判断を情動が担っていることを考えると，原初的知覚と主に本能を司る脳幹から大脳辺縁系に至る部位との関連性が今後さらに解明されていくことが大いに期待されるのである。

ただ本論は2事例の観察に基づいたものである。今後もさらなる検討が求められよう。

文　献

土居健郎（1958）神経質の精神病理—特に「とらわれ」の精神力学について．精神神経学雑誌 60：733-744．（土居健郎（1994）日常語の精神医学．pp.9-39，所収．医学書院）

土居健郎（1960）「自分」と「甘え」の精神病理．精神神経学雑誌 62：149-162．（土居健郎（1994）日常語の精神医学．pp.40-74，所収．医学書院）

土居健郎（1986）勘と勘繰りと妄想．（高橋俊彦編）分裂病の精神病理 15．pp.1-19，東京大学出版会．（土居健郎（1994）日常語の精神医学．pp.348-366，所収．医学書院）

土居健郎（1994）日常語の精神医学．医学書院．

土居健郎（2001）続「甘え」の構造．弘文堂．

土居健郎（2009）臨床精神医学の方法．岩崎学術出版社．

小林隆児（1993）自閉症にみられる相貌的知覚とその発達精神病理．精神科治療学 8：305-313．（小林隆児（1999）自閉症の発達精神病理と治療．pp.111-130，所収．岩崎学術出版社）

小林隆児（1994）自閉症にみられる相貌的知覚と妄想知覚—情動的コミュニケーションの成り立ちとその意義．精神医学 36：829-836．（小林隆児（1999）自閉症の発達精神病理と治療．pp.111-130，所収．岩崎学術出版社）

小林隆児（1995）自閉症にみられる妄想形成とそのメカニズムについて．児童青年精神医学とその近接領域 36：205-222．（小林隆児（1999）自閉症の発達精神病理と治療．pp.130-152，所収．岩崎学術出版社）

小林隆児（2001）自閉症と行動障害．岩崎学術出版社．

小林隆児（2003）広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討．精神神経学雑誌 105：1045-1062．

小林隆児（2008）よくわかる自閉症—関係発達からのアプローチ．法研．

小林隆児（2009）〈子ども－養育者〉関係の見立てと遊び．そだちの科学 12：32-37．（小林隆児（2010）関係からみた発達障碍．pp.135-145，所収．金剛出版）

小林隆児（2010）メタファーと精神療法．精神療法 36：517-526．

小林隆児・原田理歩（2008）自閉症とこころの臨床—行動の「障碍」から行動による「表現」へ．岩崎学術出版社．

Stern D (1985) The Interpersonal World of the Infant : A view from psychoanalysis and developmental psychology. Basic Books.（小此木啓吾・丸田俊彦監訳，神庭靖子・神庭重信訳（1989，1991）乳児の対人世界—理論編／臨床編．岩崎学術出版社）

Stern D (2010) Forms of Vitality : Exploring dynamic experience in psychology, the arts, psychotherapy, and development. Oxford University Press.

Werner H (1948) Comparative Psychology of Mental Development. International University Press.（鯨岡峻・浜田寿美男訳（1976）発達心理学入門．ミネルヴァ書房）